突撃！リスクマネージャー！！

医療の安全に取り組む全国のリスクマネージャー様にインタビュー！

No3. 公立八女総合病院　医療安全管理室　医療安全管理者　下川章子様

■病院概要

八女市、八女郡（立花町・広川町・黒木町・星野村・矢部村）の 1 市 3 町 2 村が開設する総合病院（330 床）。
地域がん診療拠点病院として、がん相談支援センターの設置やがん登録等を行い、関係機関と連携をとりながら、がん医療の水準向上を目指す、診療圏人口約 10 万人の八女地方の地域中核病院。

転倒・転落対策の情報収集の為に院外の研修へ積極的に参加され、
そこで知り合った同じ医療安全管理者という立場の方々との横のつながりを
大切にされているという、下川様にお話を伺ってきました。

1. 転倒・転落対策で重要なことは何だと考えられていますか？

当院での転倒・転落事故を起こされる方は、手術後や化学療法中の患者様もいらっしゃいますが、一番多いのはやはり認知症の患者様です。 認知症の方の行動は予測がつかない場合が多いので、当院へ入院される前の患者様の状況や、ご家庭での状況等をご家族から伺い、まずは「患者様を知ること」を行います。そして、患者様の状況に応じて対策を練る事が重要だと考えています。
特に、転倒・転落事故は、トイレ行動に伴うケースが多いので、「排泄行動をどのようにされているのか」詳しく聞き取るように現場の看護師には指導しています。

2. 八女総合病院様では、転倒・転落対策の為にどのようなことをされていますか？

「患者様を知る」という事に並行して、アセスメントスコアシートにより、環境面・患者要因から転倒・転落の危険度を出し、一覧表に則って対策を講じています。
例えば、当院では病室に数種類のベッドを使用していますが、転倒・転落の危険性が高い患者様には、基本的には低床ベッドを運用しています。最近では床高が 12cm という超低床ベッドも導入し、効果的な運用が行えています。離床センサー使用に関しては、写真付の簡単な適用基準表なども設け、それを参考にしながら、現場の看護師の判断を重視し、患者様に最も適した離床センサーの選択を任せています。

3. 転倒・転落対策の課題や難しいところがあれば教えてください。また、それらにはどのように対応されていますか？

認知症の方の「予期せぬ行動」に対応することがとても難しいですね。「転ばないようにこうしてください」と、説明しても理解を得ることは困難なことですし、「この方は動かれないだろう」と思っていても、気がついたら 1 人で廊下に立っている所を発見することもあります。「予期せぬ行動」が起きることを前提で対応していくことも必要なことだと思います。
そのような中で、患者様の行動パターンを把握することはとても重要だと思います。
例えば、夜間帯になるとソワソワするとか、最近の例だと、化学療法の後に決まって転倒される患者様がおられ、そういった場合は、入院期間中の患者様のイベント（手術や、化学療法）から行動パターンをよみとり危険行動を予測するよう心がけています。

4. 八女総合病院様では、独自の方法で離床センサーの管理をされていると伺いましたが、それはどのような方法なのですか？

テクノスジャパンの離床センサーは 3 機種・20 数台を導入しており、センサーの管理は ME センターで一括して行っています。
管理方法としては、センサーは必ず製品セットで箱ごと保管し、センサーと保管箱それぞれに番号を付けて管理しています。さらに、保管箱には、使用病棟・患者名・返した人の名前も記入するようにして、最終使用病棟が、どこの病棟であったかもわかるようにしています。これは、センサーの破損等があった場合に役立ちます。病棟でセンサーを使いたい場合は、ME センターに設置している貸し出し管理表に日付、センサーの番号、使用病棟、サイン等を記入してもらい、貸し出すようにしています。
箱で管理することにより製品セットの部材を紛失する心配が無く、また、管理表をチェックすることにより、どのセンサーがよく使われているのか、どの病棟で使用頻度が高いのかなどの統計を得ることができます。
最近はどのセンサーも大人気で常に貸し出されている状況ですが、追加購入が必要かどうかの判断材料にもなりますね。

5. 医療安全管理者として、現場に望んでいることは何ですか？

毎日、インシデントレポートが上がってきますが、課題が見つかった時に、「こうしなさい」と指示をしてそのままを実行するのではなく、現場看護師自らがどんどん意見を出し合って、きちんと事例の分析を行い、改善・対策案を練り上げて欲しいということです。
つい最近ですが、筋力低下によるふらつきにより転倒した患者様への対策で、理学療法士と看護師が意見を出し合う中、「リハビリのメニューを作りましょう」という声が上がり、すぐにその患者様にそったメニューつくりに取り掛かり、看護師によるベットサイドリハビリが開始となった事例がありました。この患者様にはこうしようという看護師の思いや、現場で解決しようという姿勢がとても嬉しかったです。
現場のたくさんの看護師達に、そういう感覚を大いに持って欲しいと思っています。